

第2のふるさとを求めて

「よしゃ！ ほなまかしとき！」と久米ちゃんから原稿依頼を引き受けた、矢吹です。

久米ちゃんとは反対で、私は本来関東人でしたが、平成7年より大阪短大でにわか関西人をやっておりました。

初めての関西圏の生活で、回りはおろか生徒もこてこての関西弁（当たり前じゃ）、生徒曰く「先生の授業を聞～とると、ごっつ～気持ち悪る～」とのこと、そないゆ～たって、関西弁よ～しゃべれへんわ！と言いながらも、大阪での最後の年には、岸和田だんじりを、やり回しておりました。

しかし、関西人も久米ちゃんをはじめ、本音で付き合える人が多く、今でも親しくしております。そないな久米ちゃんからの依頼やったら、いややなんてよ～言えへん！

てなわけで、私の近況ということで報告させていただきますと、平成10年7月末より日本・マレーシア技術学院に、JICAを通し派遣され現在に至っておりますが、本来のプロジェクトサイト（マレーシアのペナン）に移動したのは、平成11年11月であり、それまではマレーシア首都のクアラルンプールで約1年半ほど仮事務所で立ち上げ準備をしていました。

なんで最初からペナンでの活動ができなかったかということ、マレーシア政府側で用意する校舎の建築が非常に遅れ、今なお校舎は完成していない状況であるからです。また、校舎も完成していないことより、マレーシア側で用意するほとんどの機器等もいまだ納入されていない状況です。

しかしこのような状況でも、日本側の供与する機材は予定どおり納入されているので、これを使い口



写真中央が筆者

ーカルスタッフに技術移転を行っている毎日です（写真の後方の機器が日本の供与した機材）。

マレーシアに派遣される前までは、シンガポールほどではないにしろ、アジアの途上国の中ではマレーシアは国の経済力からしても、すべて計画通りにいくものだと信じておりましたが、最近特に計画性のなさにちょっと裏切られているところです。

しかし、いくらあせってもどうにもならないこともわかっておりますし、「郷に入れば郷に従え」でやるしかないのかな～？ また、プロジェクトの第一陣で行った専門家は、現場監督で任期を終わってしまったとの声も多く聞いておりますし...、わかるような気がします。

海外での長期生活もこれで2回目の経験をさせていただいており、10年前にはアフリカのセネガル国、そしてここマレーシアと、ともに家族共々での生活、特に家内子どもには突然の生活環境の変化にもかかわらず、文句言わず（言わせない？）ついて来てくれることに感謝しています。

そんなわけでたまの休日には、親子で好きなテニスを思う存分楽しんだり、日本では想像できないような透き通った海でシュノーケリングを楽しんだり

と、プライベートでも海外生活をエンジョイしており、遊ぶときは常に家族みんなで楽しさを分かち合うようにしております。

海外での生活は、日本を代表する仕事をしなければならないことは当たり前ですが、家族にとっては、海外で暮らせて良かったと言ってもらえるよう、第2第3の故郷と言えるような思い出づくができるようにしております。

さて、次のリレートークですが、前にも書きました10年前にいたセネガルで新規プロジェクトが開始され、そこに派遣されている宇都ちゃんです。

彼とは大阪短大時代公私共に仲良くさせていただいた仲間です。もちろん久米ちゃんもご存じですから共に推薦できるリレーとなるでしょう。

また、海外から海外へと地球規模のリレートークも面白いでしょう。それでは宇都ちゃん、よろしゅうたのんまっせ！

リレートーク【2】

富山県技術専門学院 酒井 聖司

訓大卓球部・教心研...？

東京都立亀戸技術専門校の宮崎直紀君より紹介を受けました富山県技術専門学院の酒井聖司と申します。宮崎君は訓大卓球部の2年後輩であり、ともに楽しく部活等をしていました。「リレートーク」を通じて、数年ぶりに話す機会を得ることができました。

私は、22年前（1978年）に訓大の卓球部に入部しました。当時の卓球部は関東大学リーグの5部に所属しており、下位の方の実績でしたが、文部省系の大学と対等に戦いあえたことが部存続の意義と自負心にもなっていたようです。3年先輩の坂井キャプテンをはじめ、石川、牛丸、周東、筒井先輩（以後敬称を略させていただきます）、斉藤先輩、福島さん、玉川さん、今井さん、同級の山本、横井君、マネージャーなどのメンバーで、「同好会」ではなく、「部」として活躍していました。その後、後輩に岡野、矢口、金子、谷、田中、三枝、宅島、宮崎君（写真1 1980頃訓大体育館にて）などが入部し、隆盛を誇っていました。

また訓大祭では、「うろんや」（うどん・そば屋）を毎年出店し、名物のタヌキうどんやキツネうどんなどを出し、非常に売れたものです。特にそのダシ



写真1

づくりには秘伝があり、確かカツオダシを大量に入れるのがコツで、作ったときの味が今ひとつでも、うどんとあげと天玉を入れると非常にうまくなったものです。お客さんから「このだしは、どうやってつくっているのか」聞かれることもよくあったものです。また、講義棟で店を出し、テーブルの配置やメニューにも工夫を凝らし、スムーズに配食できるように考えていました。

当然その利益は、部の道具やコンパなどの部活動の資金源になりました。また当時の卓球部（1978～1982年頃）の夏の合宿は、体育館で泊まった記憶があり、合宿の後半になると津久井湖を一周するランニングが恒例としてありました。真夏でもあり、



写真2

津久井湖周辺のアップダウンした道路が特に厳しく、半日かけて走り終え、吐く思いで走っていましたが、そのかいあって相当心身ともに鍛えられたと思っています。そのランニングの成果で、当時の訓大のマラソン大会では、石川、筒井、福島先輩などが俊足であり、団体でも優勝に近い成績を収めていました（写真2 1980年頃マラソン大会終了後の運動場にて）。

また私が1年の頃某女子短大から女子のマネージャーが入り、雰囲気も変わってきました。その後、彫刻の森にドライブに行ったことが、当時訓大寮に生活していた若輩の私にとって新鮮な思い出になりました。

3年から4年にかけては、指導科目を学びたく、指導学科の手塚先生、森先生、島田先生の研究室にいろいろな相談で出入りするようになり、数人の仲間と教心研（教育心理学研究会）を発足させ、指導学科の先生の協力を得て、訓大祭では各種検査の実施や展示をしてみました。その後新入生も少なく、自然消滅したと思います。

訓大を卒業し18年になり、研修などで体育館やグリーンホールにも立ち寄る機会があり、卓球部が廃部になったことを聞かされ、時代の推移を感じております。この誌面では書き尽くせない思い出が多くありますが、広い分野での能開総合大の後輩たちの活躍を祈念し、そして次回の「リレトーク」を卓球部1年後輩の岡野君にバトンを渡したいと思っております。

おしえて

夕毛ちゃん



作：クニ&ヒロ（54）

